

説教題：神が結び合わされた者(5～6)

聖書:マタイ 19章1～12節

<口語訳>

新約聖書30～ 頁

マタイ 19章1～12節

<新共同訳>

新約聖書36～37頁

マタイ 19章1～12節

<新改訳第3版>

新約聖書36～ 頁

マタイ 19章1～12節

<塚本訳>

新約聖書124～125頁

主題:主イエス様から賜った聖霊の導き

によって主の弟子たちは、主の名による
神の罪からの救いを宣べ伝えたように、
私たちも、福音を伝えたい。

序論；

- ◇**マタイ書**は、**使徒マタイ**が、**ユダヤ人**の立場で**王なる救い主(メシヤ)**なる**神の御子イエス・キリスト**を証言した記録です。
- ◇**マタイ5～7章**は、**神の御子イエス・キリスト様**の**山上の垂訓・説教**と表現される箇所です。
- ◇本日は、**マタイ19:1～12節**の箇所から、「**神(天)の国**」(「**神の真理・真実**」)の隠された奥義を心にとめたいと思います。
- ⇒「**神が結び合わされた者(5～6)**」は、**神**にある夫婦とされた者を「**御子イエス・キリスト様**」は、指して、弟子たちの離婚問題の疑問にお答えになりました。
- ⇒「イエスはこれらの話を終えると、ガリラヤを去り、ヨルダン川の向こうのユダヤ(人の住むペレヤ)地方に行かれた」〈1〉とありますように、十字架の死を覚悟して、エルサレムに上られるのでした。
- ⇒離婚問題は、パリサイ人が持ち掛けたもので、人が心かたくななので、モーセは、律法で許したので、創造の初めから夫婦は、一体でこれを切り離してはならないと、主は語られた。

本論；

◇本日、**マタイ書19章1～12節**から主の**使信**に**思い・心**νοῦς(nouj)をとめます。

◆**マタイ19章1～12節**；使徒**マタイ**は、「**神が結び合わされた者**(5～6)」との主のみことばを通して、「**神(天)の国**」の隠されている「**神の真理・真実**」を示しています。

◇**マタイ19:1～12節**；塚本訳◆

エルサレムへ<1～2>

- 1 イエスはこれらの話を終わると、ガリラヤを去り、ヨルダン川の向こうのユダヤ(人の住むペレヤ)地方に行かれた。
- 2 すると大勢の群衆がついて来たので、そこで彼らの病気をなおされた。

◆離婚問題<3～12>

- 3 そこにパリサイ人たちが近寄ってきて、イエスを試そうとして言った、「何か理由があれば、妻を離縁してもよろしいか。」
- 4 答えて言われた、「造物者が始めから『彼らを男と女とに造られた』こと、
- 5 また、『それゆえに人は父と母とをすてて妻に結びつき、二人は一体となる』と言われたこと

を、あなた達は読んだことがないのか。

- 6 従って、もはや二人ではない、一体である。だから夫婦は(皆)神が一つの軛におつなぎになったものである。(どんな理由があっても)人間がこれを引き離してはならない。」
- 7 彼らが言う、「それでは、なぜモーセは『離縁状を渡して(妻を)離縁することを』命じているか。」
- 8 彼らに言われる、「モーセはあなた達の心が(神に対して)頑固なために、妻を離縁することを許したので、始めからそうではなかった。
- 9 わたしは言う、不品行のゆえでなくて妻を離縁し、ほかの女と結婚する者は、姦淫を犯すのである。」
- 10 弟子たちが言う、「夫婦の関係がそんな(面倒な)ものなら、結婚をしない方が得だ。」
- 11 彼らに言われた、「そのことは(本当の意味がわかって実行すれば確かに得であるが、それは)だれにでも出来ることではない。(神から特別に力を)授けられる者だけに出来るのである。
- 12 というのは、(同じ独身でも、)母の胎内から

結婚できないように生まれついた者があり、また人から(無理に)結婚できないようにされた者があり、また天の国のために自分で(決心して)結婚しない者がある。(この最後のものが本当の独身である。)出来る者はしたがよかろう。」と、**使徒マタイ**は主のことばを語っています。

◇**マタイ19:1～2節** ;「すると大勢の群衆がついて来たので、そこで彼らの病気をなおされた(1)」、「イエスはこれらの話を終えると、ガリラヤを去り、ヨルダン川の向こうのユダヤ(人の住むペレヤ)地方に行かれた(2)」と、「**御子イエス・キリスト様**」は、「ガリラヤで大勢の群衆を癒して後、そこを去って行かれます」。

⇒「ガリラヤを去って」は、自然な表現ですが、背後には、主の重大な決意があり、十字架の死を覚悟してのエルサレムへの旅をお考えでした。決して思いつきではなく、**神のみ旨**にお従いなさるものでした。

⇒伝道者の書3:2、「生れるに時があり、死ぬのに時がある」と、ありますように、人それぞれ時の違いがありますが、主にも時があります。

◇**マタイ19:3～12節** ; 「そこにパリサイ人たちが近寄ってきて、イエスを試そうとして言った、「何か理由があれば、妻を離縁してもよろしいか(3)」、「答えて言われた、「造物者が始めから『彼らを男と女とに造られた』こと(4)」、「また、『それゆえに人は父と母とをすてて妻に結びつき、二人は一体となる』と言われたことを、あなた達は読んだことがないのか(5)」、「従って、もはや二人ではない、一体である。だから夫婦は(皆)神が一つの軛におつなぎになったものである。(どんな理由があっても)人間がこれを引き離してはならない(6)」、「彼らが言う、「それでは、なぜモーセは『離縁状を渡して(妻を)離縁することを』命じているか(7)」と、「彼らに言われる、「モーセはあなた達の心が(神に対して)頑固なために、妻を離縁することを許したので、始めからそうではなかった(8)。わたしは言う、不品行のゆえでなくて妻を離縁し、ほかの女と結婚する者は、姦淫を犯すのである。わたしは言う、不品行のゆえでなくて妻を離縁し、ほかの女と結婚する者は、姦淫を犯すのである(9)」、「弟子た

ちが言う、「夫婦の関係がそんな(面倒な)ものなら、結婚をしない方が得だ(10)。」、「彼らに言われた、「そのことは(本当の意味がわかって実行すれば確かに得であるが、それは)だれにでも出来ることではない。(神から特別に力を)授けられる者だけに出来るのである(11)」、「というのは、(同じ独身でも、)母の胎内から結婚できないように生まれついた者があり、また人から(無理に)結婚できないようにされた者があり、また天の国のために自分で(決心して)結婚しない者がある。(この最後のものが本当の独身である。)出来る者はしたがよかろう(12)」と、「**御子イエス・キリスト様**」は、「パリサイ人」が、提起した「離婚問題」を丁寧に取り扱われ、「人間創造以来、夫婦は一体で」、「人は決して引き離しはならない」と、応答なさいました。

⇒モーセが離婚を許可したには、民の心が頑なであったことを示され、独身で過ごすよう定められている者があることを示されました。

⇒独身者は、去勢者の意味で、何らかの意味で、そうせざるを得なかった人です。

⇒ヘブル13:4;【口語訳】

4 すべての人は、結婚を重んずべきである。
また寝床を汚してはならない。神は、不品行
な者や姦淫をする者をさばかれる。

結論；

◇神は、変わらない愛と思いやりの神です。

◇マタイ書は、使徒マタイが、ユダヤ人の立場で王なる救い主(メシヤ)なる神の御子イエス・キリストを証言した記録です。

◇マタイ5～7章は、神の御子イエス・キリスト様の山上の垂訓(説教)の箇所です。

◇本日は、**マタイ19:1～12節**の箇所から、「**神(天)の国**」「**神の真理・真実**」の隠された奥義を心にとめたいと思います。

⇒「**神が結び合わされた者**(5～6)」は、**神**にある夫婦とされた者を「**御子イエス・キリスト様**」は、指して、弟子たちの離婚問題の疑問にお答えになりました。

⇒「イエスはこれらの話を終えると、ガリラヤを去り、ヨルダン川の向こうのユダヤ(人の住むペレヤ)地方に行かれた」〈1〉とありますように、十字架の死を覚悟して、エルサレムに上られるのでした。

⇒離婚問題は、パリサイ人が持ち掛けたもので、人が心かたくななので、モーセは、律法で許したので、創造の初めから夫婦は、一体で

これを切り離してはならないと、主は語られた。

⇒**KT師**は、主に近づく人々は、主を試しつつ、試され、その本性が明らかにされると、言われ、教会の礼拝も、主のみことばを聴くことで、本性が明らかにされ、罪の現実に 気づくのだといわれるのです。

⇒旧約では、申命記24:1～4だけが、離婚の規定が記されているところだと、**SY師**は仰せです。

⇒ローマ6:6～11【口語訳】

6 わたしたちは、この事を知っている。わたしたちの内の古き人はキリストと共に十字架につけられた。それは、この罪のからだが減び、わたしたちがもはや、罪の奴隷となることがないためである。

7 それは、すでに死んだ者は、罪から解放されているからである。

8 もしわたしたちが、キリストと共に死んだなら、また彼と共に生きることを信じる。

9 キリストは死人の中からよみがえらされて、もはや死ぬことがなく、死はもはや彼を支配しないことを、知っているからである。

- 10 なぜなら、キリストが死んだのは、ただ一度罪に対して死んだのであり、キリストが生きるのは、神に生きるのだからである。
- 11 このように、あなたがた自身も、罪に対して死んだ者であり、キリスト・イエスにあつて神に生きている者であることを、認むべきである。
- ⇒ 私たちは、罪赦された罪人で、罪を犯しますが、罪の下に留まらず、**神の赦しの恵み**の下にいる者です。
- ⇒ 罪赦された兄弟姉妹の仲間、夫婦等として、互いの弱さを受け入れ、主の慰めを祈って行く主の教会の群れでありたいと願います。